

e ラーニング質保証レイヤーモデルを用いた 授業分析・設計支援ツールの設計

Design of the Lesson Plan Analysis and Design Tools for Higher Education Based on the Layer Model for e-Learning Design

西本 彰文^{†, ‡}

Akifumi Nishimoto

[†] 熊本大学教育学部

[†] Faculty of Education, Kumamoto University

[‡] Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

久保田真一郎[‡]

Shinichiro Kubota

[‡] 熊本大学大学院教授システム学専攻

〈あらまし〉 現在の組織的なFDは、必ずしも大学教員の自主的・主体的なFD活動の促進を支援する体制にはなっていない。そこで、我々は個々の教員が自身の講義を分析し、設計することを支援するツールを開発し、その結果、教員の活動をサポートし、授業改善活動につながることをねらいとしている。この支援ツール開発には「eラーニング質保証レイヤーモデル」を利用し、インストラクショナルデザインに基づいた支援ツール開発を目指す。本報告では、教員個々を支援するツールの機能についてレイヤーモデルの視点から検討を行う。

〈キーワード〉 FD, eラーニング質保証レイヤーモデル, インストラクショナルデザイン

1. 研究の背景

大学院に引き続き、大学においても組織的なFDが義務化され、各大学で様々なFD活動が行われている。しかし、FDの実施内容が必ずしも「個々の教員のニーズに応じた実践的な内容になっておらず、教員の日常的教育改善の努力を促進・支援するもの」として機能するまでに至っていない(中教審 2008)と指摘されている。

他方で、FDの実質化には大学教員による自主的・主体的活動による下支えが必要であると考えられる。しかし、それらの活動は脆弱な段階に停滞したままであるとの指摘(有本 2007)がなされており、大学教員の自主的・主体的活動を支援する方略が必要である。支援する方略としては、例えば、授業評価結果から容易に改善提案を行う機能をもつツールの開発が考えられる。

筆者の属する熊本大学に於いても様々なFD活動が行われている。例えば、学生記入のマークシート形式による全学全科目授業評価、教員による授業参観、FD講演会などである。これらは、全学的に行われているが、教養教育を中心に行われており、専門教育に目を転じると、組織ごとに温度差がある。また、授業評価の質問項目は全学で同一の質問用紙を使用しており、画一的な質問に終始している可能性がある。さらに、授業評価結果の利用についても、学部によっては上手く生

かされていない。他にも、PBLやLTDといった新しい教授方を導入するための情報提供サイトなども開設されている(本間 2007)が、伝統的な講義方法については他大学へのリンク集のみが設定されているだけである。

このように、全学レベルでは活発なFDが展開されているが、教員による自主的・主体的なFDという視点に着目した場合、個々の教員を対象に教授設計をサポートする、インストラクショナルデザイン(ID)の視点を加味したツールは管見する限り、存在しない。

そこで、本研究では、個々の教員を対象とした授業分析・設計支援ツールの開発を試みることを目的とし、本報では本授業分析・設計支援ツールの設計について報告する。

2. 授業分析・設計支援ツールの検討

開発する支援ツールは、鈴木(2006)の提唱する「eラーニング質保証レイヤーモデル」(以降、レイヤーモデル)を用い、IDプロセスモデルの1つであるADDIEモデルの、分析(A)、設計(D)段階をサポートする事を目的としているも

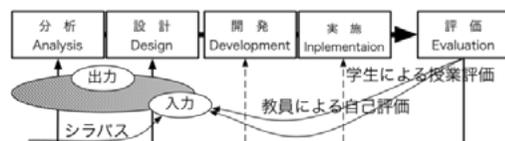


図1 本支援ツールの概要

のである。図1に示すように、学生による授業評価や、教員の自己評価、シラバス、ICT環境を本ツールへ入力し、出力として、コースの分析設計に資する内容、例えば、学習課題構造の可視化や、具体的な方略の例示を想定している。これらの出力により、問題点が顕在化し、形成的評価を支援する事が可能になる。そのため、開発する支援ツールが個々の教員に必要である。また、入力には教員が各レイヤーに対応したチェックリストに答える形で行う形式を想定しており、入力する者が、ID諸理論について高い専門知識を持っていないでも容易に利用出来ることを目指している。

なお、今回の開発では、本ツールの対象を既存の科目で、講義形式を主体とし、学習目標が、言語情報・知的技能を中心とする科目に限定した。

これらは、大学において最もポピュラーな講義方式と言える。また、既存の科目を対象とした理由は、本ツールが教員の自主的・主体的なFD活動を支援することを意図し、さらに既存の科目の形成的評価を通して、個々の教員にIDについて関心の喚起することを意図したためである。IDは、教育の効果・効率・魅力を高める手法で、教員が個々のFDを行う上で欠かせない方法論のひとつである。

3. いらつきのなさ、わかりやすさ(レベル-1, 1)の検討

開発する支援ツールは、筆者の属する熊本大学において活用しやすい形とするため、特に、レイヤーモデルの「レベル-1：いらつきのなさ」および「レベル1：わかりやすさ(情報デザイン)」について、熊本大学の環境、特にICT環境を想定し、当初からテンプレートを組みこむこととした。具体的には以下に示す内容について必要に応じて適時提示することとした。

レベル：-1

- ・ 無線LAN環境の有無、利用出来るLMS環境
- ・ ICT環境のSLA(Service Level Agreement)
- ・ ICTの代替手段の有無
- ・ eラーニングなどのマニュアルの整備の有無

この他に、4個のチェック項目がある。学習者から見たレベル-1要件に合致すると考えられる項目について、チェックリストを作成し、

今後形成評価により、これらの項目が十分であるかさらに検討を行う。

レベル1

- ・ 熊本大学ポータルへの対応(SSO)
- ・ 統一されたユーザビリティデザイン
- ・ ブレンデッドによるデザイン
- ・ シラバスの整備、項目の整理

以上のように、熊本大学での主にICT環境について整理を行った。これらの情報を本ツールにテンプレートとして組み込むことにより、教員側の視点として、より効果的な講義方法の選択を促すことが出来る。特に、ブレンデッド型など、eラーニングを併用する場合に有効な出力を得ることが出来る。レベル-1及び、レベル1のレイヤーは、学習者の精神衛生上に影響を及ぼすものであり、できるだけ排除し、学習者の動機づけを下げない工夫が必要である。

4. 今後の予定

本報では、教員の自主的・主体的なFD活動の促進を支援するツールとして、鈴木のレイヤーモデルを用いた授業分析・設計支援ツールの設計、特に学習者の精神衛生に関わる項目について検討を行った。今後、形成評価を行うとともに、他のレイヤーについての検討を行う。また、併せて具体的な出力イメージを紙ベースで作成し、プロトタイプの開発を行う予定である。

参考文献

- [1]中央教育審議会(2008)「学士課程教育の構築に向けて」(答申)
- [2]有本章(2007)「FD制度化の現状と展望」メディア教育研究, 第4巻, 第1号, pp. 9-18
- [3]本間里見(2007)「授業方法改善のための学内支援サイトKU:TOの構築」, 大学教育年報 Vol. 10, pp. 45-49.
- [4]鈴木克明(2006)「IDの視点で大学教育をデザインする鳥瞰図：eラーニングの質保証レイヤーモデルの提案」日本教育工学会第22回全国大会講演論文集, pp. 337-338
- [5]鈴木克明(2005)「e-Learning実践のためのインストラクショナルデザイン」, 日本教育工学会論文誌, 29(3), p. 197